



1990 年 (平成 二年)
12 月号 (No. 546)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

- アルタイ山地の旅……木下是雄……(1)
海外の山……(2)
「ローツェ南壁」
村木副会長「自然保護講演会」
についての紙上討論(第 1 回)……(3)
尾瀬問題の解決のために……(3)
平成 2 年度全国支部懇談会山形集
「90 蔵王の集い」……(4)
支部創立 30 周年記念「由布岳の集い」
……(5)
追悼 後藤幹次氏……(5)
山研改築委員会の発足について……(6)
追悼 篠田軍治氏……(7)
東西南北……(6)
「トルコの月山」「立山・剱岳秋立
ちぬ」ほか
図書紹介……(9)
「東北百名山」「山と風と」ほか
自然保護随想……(11)
報告……(12)
「日山協との懇談会」「会員懇談会」
「石間さんと山歩き」「三水会創立
15 周年」「宮崎ウエストン祭」
「北海道初秋山行」
会務報告……(16)
評議員会、10 月理事会、11 月理事
会、ルーム日誌、タンボチェ僧院再
建協力者ご芳名、図書受入報告、新入
会員(復活)、住所・住居表示変更
お知らせ……(18)

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせテレプ電話

234 六六五九

アルタイ山地の旅

木下是雄

シベリア鉄道はモスクワを出てからウラジオストクまで九〇〇〇キ。その四割弱を走ってオビ川を渡るところにノヴォシビルスクの町がある。六月下旬にそこで国際学会に参加し、会の後のエクスカーションでアルタイ山地のキャンプ旅行を楽しんだ。一行は男女二十数人、外国人としてブルガリア人ひとりと私達夫婦が加わっていた。

ロシア連邦共和国のアルタイ地区は東西五五〇キ、南北四五〇キ、日本全土の六割の面積がある。北半分は平地だが、南半分は南に向かって徐々に高まる山地で、ついにソヴィエト・アルタイ山脈に達する。山脈はカザフ共和

国との国境で、最高峰はベルーハ(四五〇六ミ)、その付近の氷河群はオビ川の水源である。この山脈は、中国の新疆ウイグル自治区の北端をかすめてモンゴルに入り、南東に走ってモンゴル・アルタイ山脈となる。

私たちは実はベルーハにはまだ二〇〇キもあるアルタイ山地のとは口をうろついただけだが、この地域は外国人には解放されていない。「日本人がきたのははじめて」ということだったから、この通信も無意味ではなからう(私たちの入域許可は会議側の申請による)。

一行は、シベリア鉄道支線の寝台列

車でノヴォシビルスクから三〇〇キ南下し、終点ビースクから専用の小型バスを雇って八〇キ走って、山地の入口のゴルナ・アルタイスクに着いた。

この町で全員が旅券のチェックを受けた後、カトゥーニャ川右岸をさらに二〇キ南下してユーノストのキャンプ場に入る。ここは、樹高二〇ミもあるシラカバとマツの林を切り開いて木造の建物をゆったり配置した施設で、時間になると方々のキャンピングから多勢の青少年が湧きだして食堂につめかけてくる。この川添いのキャンプ場が私たちの根拠地になった。

一、二日、不安定な天気が続いたが、ようやく夏が到着して明るく晴れ

がそろったのがなんと一五時すぎ、左岸上流の目的地の砂浜に着いて幕営にかかったのは二時半だったという。もっとも、この時期このへんでは、二三時をすぎないと暗くならない。私たち二人は馬はためなので、例のバスで右岸を遡り、彼らの幕営地の対岸の樹林の中にテントを張った。翌日になると、何人かが「馬はもうコリゴリ」と急流を一人ずつカヌーで渡してもらって私たちに合流してきた。その人たちと荷物を積んで帰るのにバスが役立った。騎馬隊の本隊はその夜おそくなつて根拠地に帰着した。

次の日は、全員バスで一〇〇キ余り東方のテレツコイエ湖に移動した。こ

次代に残そう美しい山と溪

れは全長七六キ、Tの字の形をした細長い湖で、Tの横棒の一端にキャンプ・サイトがある。バスで運んだテントをそこに張った。この国では男女ともに乗馬とキャンプは標準的な教養になっているらしく、誰も指図をする人がいないのに皆が然るべく動いてテントを立て、大きなたき火をして炊事を進めるさまはみごとだった。夕食の肉粥は美味だったが、群がり寄せる糠蚊には音をあげた。

翌朝、霧が上がると快晴。高速船で湖の中心部まで往復する。湖の周辺は自然保護地域で、私たちが泊まったところ以外では船を五分間以上接岸させることは許されない。それだけに兩岸の林相はみごとで、山肌を埋めつくしたミミ、トウヒ類の林、湖岸に迫るシラカバの純林はいつまでも見飽きない。特に印象に残るのは、ほそく尖った樹冠をならべて稜線を鋸歯状に飾っていたエゾマツである。

湖が幅一キロに狭まったところで船が急に減速して右に転針する。前方にマラール(シベリア鹿)の牝が一頭、長い首をもたげて静かな湖面を泳ぎ渡っているのだった。

帰りは、一行と別れてゴルナ・アルタイスクからノヴォシビルスクに飛んだ。北上するに従って、眼下に豊かな農業地帯が展開してきた。

海外の山

ローツェ南壁

ローツェ(八五一六呎)屈指の難ルート、南壁が、今年相次いで陥された。

十月十六日、アレクサンドル・シェフチェンコを隊長とするソ連隊が新ルートから二人のクライマーを頂上に立たせた。ウラジミール・カラツェフ(三六)とセルゲイ・ベルチョフ(四三)で、頂上直下の雪洞から最後の二〇〇呎に十二時間をかけての登頂だった。

標高差三一〇〇呎、これまであらゆるクライマーを拒んできた南壁を最初に手中にしたのは、三十歳のユーゴスラビア人、トモ・チェセンだった。本人は全然意識しなくとも、一人の人間が自分の国を知らないうちにPRするような状況が時として生じるが、トモ・チェセンは、そんな人間の一人になったかもしれない。というのは、チェセンの登攀ぶりを知って、メディアが何か書く時、大抵六つの共和国から成るユーゴスラビアのどこ出身で、どんな暮らしをしているか、などについても取り上げるからだ。

チェセンは、四月二十四日、たった一人であのローツェ(八五一六呎)を南壁から登った。

一年前、この欄で「ククチカの死」を書いたが、メスナーに次いで八〇〇〇呎全十四座を足下にしたそのククチカが死んだのが、この南壁だった。「ヒマラヤ最後の難壁」とジャーナリズムが、声高にもてはやしたその南壁をチェセンは、四十五時間で一人で登ってしまったのである。

一年前には、チェセンはジャーナル北壁をたった一人で登り、世界を驚かせた。二十六歳のときには、アルプスの三大北壁、グランドジョラス、アイガー、マッターホーンを一週間で登りきっている。

その昔、エドモンド・ヒラリーが初めてエベレストに登った時、ニュージーランドという国が少し有名になったように、ククチカやクルチカがポーランド勢の強さを世界に示したように、チェセンも「ユーゴスラビア魂」のようなものを並みいる登山家たちに見せつけた。

当人はひたすら家族を愛する家庭人の素顔を持っているようだが、これでチェセンの次の山登りは、世界中から注目されることとなった。

一方で、ヒマラヤへの最近のソ連クライマーの進出は特筆に値する。一九八九年のムイスロフスキー隊長ひきいる、カンチエンジュンガの全山縦走はすごかったし、今回のローツェ南壁も並みの力ではない。昨年来の社会主義国家の激変は、今後ヒマラヤでクライマー人脈図の変貌を促進するだろう。

エベレストではソ連人の夫とアメリカ人の妻が、西ドイツのシュマツ夫妻以来のおしどり登頂(シュマツ夫人の場合は帰らなかったが)を果たし、若冠十七歳の少年が最年少登頂記録をぬり変えた。

ローツェ南壁の完登は、最先鋭部分では常にアルピニズムが前進していることを証明したと思う。登るべき場所はない、ということはこれからの時代である。ある意味で、さらに恐ろしい時代になった。

(江本嘉伸)

△ △ △

海外の山

村木副会長「自然保護講演会」

についての紙上討論(第一回)

自然保護委員会

『山』九月号で提案した標記の紙上討論として、会員からの投稿を掲げる。これについてのさらなる討論をお願いする。

* * *

自然保護に関する意見 登山界でもエベレストまで登山隊のゴミで汚染され、ヒラリが「五年間入山禁止」を唱えるほど、とは。

日本山岳会は、まず登山者自身や登山関係業者達の自然破壊汚染防止啓蒙運動をさらに強化する一方、外部に対する運動については村木副会長のご意見通り、社会との調和を考慮に入れて実行することに賛成。

(広瀬 潔・九三二)

* * *

環境問題の討論をもっと重ねよ 日本はGNPおよび個人の利益、快楽追求にばかり目がくらみ、都市のエゴイズムをふりまわして地球百年の大計を忘れていく情ない国になった。地球環境悪化のリトマス試験紙の役割を失っている森林の荒廃は待たなしの重大問題である。ただ反対反対と騒ぐだけでは駄目で、私たち消費者の浪費が環境

破壊の元凶になっていることを自覚反省し、ある程度の景気後退、不自由化は覚悟の上で行政や企業に働きかけて改善して行くべきであろう。JACでも土曜日に二三日間(合計十〜十五時間)かけて環境関連の国内外の文献・法律などを基に討論を重ね、NHK、新聞社などのマスコミを通じて世論に訴えるようにすべきである。それと共にJACの図書室にこのような環境関連の図書ができるだけ用意してほしい。

(二木久夫・九四八五)

* * *

具体的事例での討論を 村木副会長のご意見は講演もお聞きしたが、総論というか莫然とした感想としては分る。しかし、なぜ今とくに日本山岳会という集団の中でこうしたことが言われるのか、その真意がよく分らない。全国支部長会議での講演では、その内容はもっと明確であったと聞く。そこをお願いであるが、この総論の真意を各論に適用して、次の二つの具体的な場合について改めて村木氏の考えを聞きたい。

①裏岩菅山の滑降コース開発問題は

応決着したが、村木氏の理想では「どうすべきであった」か。

(本多勝一・五七六六)

* * *

かげの主役を見抜け 地域との調和を具体的に考えると、地域住民の希望する方向になり易い。多くの場合、地域の人びとは資本がなく、大手資本の力を借りようとする。ところが最近はその手法も巧妙になり、主役はなかなか

尾瀬問題の解決のために

自然保護委員会

尾瀬は特に昭和のはじめから、電源開発と自然の保存の問題で幾度となく揺れ動き、昭和四〇年代に起こった観光道路の問題を契機に、わが国の自然保護運動の象徴的な存在として、社会的関心を集めてきた。

特に、最近では過剰利用とまで言われる程の大勢の人が、しかも集中的に入り込むことによる自然への影響がたいへん心配になってきている。このように、尾瀬の自然が人為的な破壊を受けて尾瀬本来の原始的風景が失われることを恐れる人々によって、ここ数年来、いくつかの具体的な提言が発表された

か前にあらわれないことが多い。事実、裏岩菅山のスキーコース開発の主体は、地元の山内町と言うことであつた。しかし、その背後には巨大資本が貴重な山岳自然を利用して、大もうけを企んでいたのである。「地域との調和」は確かに重要であるが、一般の人びとはあまりにも目前の利益にのみ、とられ勝ちである。山岳人としての個人的な話し合いによる地道な啓蒙運動とともに、背後にあるかくれた主役を見抜くことが大切であろう。

(澤井政信・八二四〇)

ことは周知の通りである。

このような動きの中で、昨年マスコミによって取り上げられた「入山料徴収」は多くの人々の誤解を招きかねないものであった。また、一部の新聞に「日本山岳会も入山料の徴収に賛成」と報道されたが、十分に討議された結果の本会の意見ではない。

私たち日本山岳会関係者は本会の創立以来、幾たびか尾瀬をめぐる色々な問題に取り組んできたが、自然保護委員会では昨年の秋以来、この「入山料」問題について重ねて討議した結果、「尾瀬問題」の解決のためには単に入

山料を徴収すればすむといった単純なことではなく、他になすべき多くのことがあるとの結論に達した。『山』の紙上をかりてその結論を述べ、会員諸氏のご批判を仰ぎたい。

一、早期実現に向けて、とるべき対策
1. 輸送体系の整備について。

尾瀬の観光地化を少しでも食い止める策として、家用車、バスなど、小屋の業務用の車を除くいっさいの車を入山口で止める。すなわち、群馬県側は富士見峠・鳩待峠方面は戸倉地区、三平峠方面は清水地区で、福島県側は御池地区で止め、駐車場を完備する。とくに水芭蕉・シーズンの土、日曜にのける観光バスによる大量輸送は尾瀬の観察、探索上からみて限界に近く、旅行者者に自粛を求めたい。

2. し尿、雑排水の処理施設について。
自然生態系への人為的影響を少なくするためには、処理浄化槽の早期設置とその管理が必須の条件である。この件についてはすでに環境庁でも見晴地区にパイプラインによる排水処理計画を立て、そのための予算処置もして実行の準備をしているところであるが、さらに次のことを提案する。

①施設は、尾瀬沼地区、山の鼻地区においても設置し、その浄化処理方法についても研究するよう努力して欲しい。

い。

②施設の維持管理については、管理者、山小屋などが当り、その経費については、国費の補助を希望するが、利用者がその一部を負担するのは当然であり、トイレの有料化や山小屋の宿泊料への上乗せなどもやむを得ない。

3. 山小屋の風呂について。

先ほど、山小屋組合は、利用者が集中する土、日曜日に限って、風呂を取りやめる方針を打ち出したが、これを通年、風呂を使用しない方針にする。

4. 山小屋で提供する食事について。
山小屋の食事はなるべく終末処理し易いものにし、油類を用いるときには紙で拭き取って燃やすなど排水を汚染しないようにする。

5. 高山植物の保護とゴミ持ち帰り運動の徹底。
貴重な高山植物の採取などもってのほかであり、さらにその保護のためにも木道の外に踏み出せないようにする。また、尾瀬のゴミ持ち帰り運動は、現在かなりの成果が上がっているが、これを範として尾瀬に限らず、ゴミ持ち帰りをすべての山行で完全実践することを利用者は申し合わせよう。

二、中、長期的な対策

木道の廃止や、山小屋などの施設の特別保護地区外への移転問題が大きく議論されているところであるが、この

ことは、単に山小屋の経営の死活問題にとどまらず、現状の山小屋の数の増加は尾瀬の原始的風景の破壊にもつながりかねない等いろいろな問題をはらんでいる。この多面的な問題について

平成二年度全国支部懇談会山形集会

『90 蔵王の集い』

山形支部

山形支部の創立四十周年を記念して、平成二年度全国支部懇談会は、平成二年十月十三日と十四日、山形市蔵王温泉の蔵王アストリアホテルと蔵王山を会場に日本山岳会「90蔵王の集い」として全国から多数の会員が参集して行なわれた。

十月十三日は、朝十時から受付が始まったが、受付開始前から到着されている会員もみられ、盛況の予感がただよう中、受付場所では再会を喜ぶ会員が多くみられた。山形支部苦心の記念品は、地元の代表産である鑄物の山岳会マークの文鎮である。希望者には文鎮の裏に会員番号を刻印するとい

ので、刻印担当者はてんでこまいのいそがしさであった。十三時から支部事務局担当者会議が進められたが、ほかの会員には蔵王スキー場のビデオ上映、百人以上入浴可能という大露天風呂の案内などがあり、十五時からは

は、国などの管理者や自然保護生態系学者、法律家など各界の専門家、および山小屋関係者や利用者代表等からなる検討委員会を組織して、綿密に検討し解決するよう希望する。以上

蔵王セミナーが開かれた。まず会員で、山形民芸協会の理事の大久保義彦氏から「やまがたよもやま話」として山形の環境をとりまくことがらを数字をあけての話があり、次に会員で山形応用地質学会幹事の田宮良一氏から「蔵王の自然」と題して蔵王温泉の今昔など、地質的考察などの話があり、最後に山形放送製作の「樹水のなぞに挑む」という神秘的な樹水の生成についてのビデオ上映があつて五十名程の会員が参加した。

夕方は、六時から懇談会が行なわれたが、会に先立って、十月二日、八十五歳でなくなった前山形支部長で名誉会員の後藤幹次氏の冥福を祈り黙禱を捧げた。後藤幹次氏は、地元では「幹ちゃん」として皆から親しまれ、特に蔵王の父といわれる程、蔵王の生い立ちに関与された来た。そしてこの懇談会を心待ちにしていただけに残念

の想いがひとしおである。

懇談会は、型どおりの乾杯などがあつてなごやかに進められた。会場には山形銘花の紅花入り氷柱や、氷の彫

追悼

後藤 幹次氏

日本山岳会名誉会員であり、山形支部創立者の後藤幹次さんが、十月二日天寿を全うして永眠されました。

後藤さんは県立山形中学にて私の先輩であり、昭和のはじめ開かれたばかりの朝日連峰縦走コースを、後藤さんはリーダーとして踏破中、泡瀧で遭遇した大鳥川増水事故を、冷静な判断で処理された報告は、少年の私に自然に対する謙譲さの必要を、心に銘じて教えてくれたものでした。郷里の御宅が寛永時代から続く旅館であり、郷土の山蔵王を想わせるおらかな御人柄の後藤さんは、各地から山形の山々を訪れる岳人を、いつも温かく迎えて下さいました。こうして地方と中央の岳人の交流は後藤さんを通して、深まって行きました。

後藤さんは蔵王地蔵岳のお花畑に建つ地蔵さまを深く信心し供養を続

刻もかざられ一段とムードを盛り上げたが、地元会員の林さん作製になる二十種に余る薬酒コーナーが人気の的であつた。スグレ、サルナシ、キハダな

けて参りました。また地蔵保存会を地元の方々と結成し、自ら会長を務めて手厚く奉讃してきました。昭和の初め蔵王は冬山遭難の多い山でした。遭難者の出るたびに、後藤さんは仲間を動員して捜索救助に尽力、見知らぬ人のため無償の奉仕を続けたのでした。リフトも指導標もない時代、ここで吹雪かれたら方角は全然わかりません。そしてここで雪面から頭を出している地蔵さまを見付けることは生還への指導標でありました。岳人としての先達であつた後藤さんは、そうした思いから保存会を結成、毎年雪のくる前地蔵さまの大祭を致しており、今年も九月二十四日秋季大祭のためハイサックを背負って蔵王に登って行かれました。そして一週間後の十月二日亡くなられました。終生山とそこに関係ある人々を愛した後藤さんの、これが最後の山行となつたのでありました。

なお多年にわたり日本の観光事業につくされた功績により正六位が追贈されました。(清野 恒)

どなど、色とりどりの酒を前に自然酒談義がつづいた。ほかに山形名物のそば屋台、もち屋台、こんにやく屋台は売れ行き好調、また山形秋の風物詩いも煮屋台も、山形の思い出にと所望する会員でたちまち鍋が空になる程であつた。二次会は場所をうつして夜半過ぎまで続いたが、この頃から外は、土砂降りの雨に変わり、明日の登山が心配となつて来た。天気予報は全国的な悪天候を予想していた。

十四日、ところが、朝めざめた時は、雨がやみ、朝食の終った七時半頃は、秋晴れの一日に変わる兆しの中、玄関前で記念撮影を行なった。全員が、紅葉を愛でながらロープウェイをのりついで、後藤幹次氏がこよなく愛した地蔵様に幹ちゃんをしのび、①②コースとも熊野頂上についた。

①コースは中丸山を経て、坊平をめ

支部創立三〇周年記念

「由布岳の集い」

東九州支部

東九州支部の創立三〇周年を記念する「由布岳の集い」が十一月三、四日の両日、大分県湯布院町の湯布院ハイツと由布岳(一五八三・五郎)で開かれ、参加者およそ百人が九州の秋を満喫した。

ざした。天候にも恵まれ、秋の蔵王を十分楽しむことができた。朝日、飯豊の遠望に気を良くしたが、コース最後の坊平への登りはきつく、昨夜の報いを感じた会員が多かつた筈である。ようやくたどりついた坊平の清水ではよく冷えたビールが各人に配ばられ登山のしめくりが行われた。

②コースはワサ小屋までもどり、いろは沼、観松平とのんびり秋のそまうに晴れた心地よい秋空も、参加者がそれぞれ山を離れた頃から雨にぬれ始めて全日程も幕となった。

最後に、全国規模の集まりを山形支部としては、鋭意とりくんだつもりであるが、参加者一五八名の皆様にはなにかと迷惑をかけたことがあつたことをお詫び致します。(梅津 博)

三日は午後四時半から記念集会。梅本支部長の挨拶のあと、わざわざかけつけた山田会長が「日本登山界の現状と未来」について講演、さらに宇津宮副支部長が医師としての調査・研究に基づき「高所登山の人体に与える影響」



講演を終わり花束を受ける山田会長

をスライドを使って報告、梅木支部長の由布岳の紹介もあった。続いて懇親会となり、権藤福岡支部長の祝辞、魚本宮崎支部長の乾杯で開会、本部・東京をはじめ、岐阜、東海、京都、関西、さらに隣県の支部から参加した全員が壇上からお祝いを述べ、歌なども披露、奥野熊本支部長の発声でバンザイしたあとも深夜までなごやかに交歓した。

四日は約五十人で登山。九時に由布岳の東登山口から入り東峰と西峰に登頂、正面登山口に下山して午後二時半に現地解散。雨上がりのガスのため視界は悪く、強風も加わるあいにくの天候だったが、ちょうど紅葉の最盛

期。草原を歩き樹林の落ち葉を踏み、岩を攀じての山上乾杯など、南国の山を十分に堪能できた。

なお、支部では集会のための記念誌を同日に発行、さらに記念行事の一環として「ガイドブック・おおいだ一〇〇山」も近日中に刊行を予定している。

(文責・梅木秀徳)



トルコの月山

梅野 淑子

私がまたトルコの山へ行くことになったのは、去年カップパドキアへ行った帰りそこにそびえるエルジェス山(三九一六メートル)を見て、どうしても登りたくて登って見たが、頂上直下の岩場に阻まれ、また時間もたらず、やむなくあの谷中で崩れるのではないかとと思われるような沢を下りたのだが、その恐ろしい沢も終わり、穏やかな台地に出た所にテントを張っていた地元大学の先生二人の中のドクター・ビルゲが、今年の二月頃コーカサスの山

山研改築委員会の発足について

上高地山岳研究所は建物の老朽化に加え、以前から諸設備の不備・不便さが指摘されておりました。また、管理人室が不衛生である等問題点が多く、その改善は早くから望まれてきたところです。山研改築の可能性については山研委員会で鋭意模索して参りましたが、最も懸念された行政官庁の許可が得られる見通しが立ち、さらに改築に必要な諸々の

条件も整ってきましたので、以後改築に向けて本格的に動き出すため、十月の理事会で、藤平副会長を委員長とする山研改築特別委員会の設置が決まりました。一応平成四年末の完成を目標としておりますが、多くの会員のご意見を聞きながら本会にふさわしい山岳研究所を作りたいと存じます。

委員会の発足をとりあえず簡単に報告いたします。

(石橋)

へ行きませんかとお手紙を下されたからだ。冬の山へは急には行けないのもちろんお断りしたが、夏もう一度あのエルジェス山へ行ってみようと思いついた。今度こそ頂上をふんで、また他に一つか二つ登れる山を探してみようと思った。

カイセリについてエルジェスに登る前に、ハッサン(三二六八メートル)に登ることになり、ビルゲ先生の紹介状を持ってバスを乗り継ぎユカリディクメン村に着いた。手紙の宛名の家を探すが村中同じ姓で、ここだあそこだとまわされ三軒目でやっとその女性に会うことができた。彼女は手紙を読むとそれを抱きしめ、「これは私の先生からのだ」といってお腹の傷を見せた。ドク

ター・ビルゲは外科医だったのだ。その間私は英語、彼等はトルコ語の永久に解決しない会話のあと二軒目の家のおじいさんがドイツ語ができることがわかりやっと解決したのだった。彼女の家でまた食事が出された。前二軒でもごちそうになったので、私は三回も食事をすることになった。でも私のために鶏までつぶしてくれたのだから。

翌日彼女の息子が山に同行してくれた。トルコの山はくわしい地図も手に入りにくく、指導標はおろか何の標識もないから自分で判断して行くしかない。それだけに面白いともいえる。私には案内がいたので登り八時間、帰りはビバークといわれたのに十二時間で

往復できた。頂上は三つに分れみな岩場だった。

さてエルジュス山へ登る日、ビルゲ先生の家を出発予定の夜九時頃、去年山でお会いしたもう一人のドクター・サーラムが訪ねてこられた。山頂まで

追悼

篠田軍治氏

名誉会員篠田軍治氏は去る十月七日岡山のご自宅で亡くなられた。享年八十六歳であった。

同氏のご略歴は以下に記す通りで、細かい山歴などは省略するが：大正十五年三月 京都帝国大学理学部卒業

昭和十四年六月 大阪帝国大学教授に任ぜられ精密工学、応用物理学担当

昭和四十二年三月 停年退官

昭和四十二年十月～昭和四十七年三月

日本女子大学家政学部教授

昭和四十四年十二月 通産省「雑貨の安全確保に関する山岳用水中用スポーツ用品安全対策委員会」会長
昭和四十九年 勲二等瑞宝章に叙せられる

戦後の混乱期に関西支部長として多士済々活力溢れんばかりの関西登

行けないが途中まで送って下さるといふ。結局十一時出発した。でも先生の家は街のはずれエルジュス大学の構内にあり、車で三十分も行くともうスキーロッジのある一五〇〇呎ぐらいの所に着く。直ちに歩き出す。満天の

山界をまとめ見事に軌道にのせられたこと（昭和二二・二三・二四年）、当会のマナスル登山隊の酸素補給器については（柳川崎航空機を指導して戦時中のアルミ合金ボンベを活用して、当時としては立派な装置を準備して頂いたこと（昭和二八・二九・三〇年）、大阪大学山岳部長として優秀な登山者を育成し、P29 峰登攀の総隊長として前後四回に及ぶ根気強い登山の指導をされたこと、特にマナスル、P29 西面、ツラギ氷河付近の地形を明らかにされたこと（昭和三八・四〇・四一年）、などは日本山岳会、登山界に対する大きなご功績として忘れることはできない。

私は山岳会員として接した部分と、鉄鋼材料の研究者として接した部分とがあり、後者については金属材料の強度、非破壊試験の分野でも教えられることが多かった。

それについても残念なのはナイロンザイル事件である。ナイロン繊維で作られたロープそのものの強度（破断時の応力に

星。カイセリの街の灯が空気が澄んでいるせいか今まで見たこともない程くっきりと輝いている。お二人は「ブラボーカイセリ」と叫んでいる。二時間ほど登った所でサーラム先生は私達にスロープなどを作って下さって帰って

よる」と、そのロープがどういう条件の時に切れ易いかということとは別個に論ずべき問題である。事実、ナイロンロープの切断によって死亡した人もあったが、ナイロンロープの強さによって九死に一生を得た人も多い。現に私もその一人である。また、登山用ロープは切れないに越したことはないが、設計された機械部品とは違って衝撃時の安全率はないに等しい。切れないように使うのが岩登りの技術であるとする考えもあることを思うと、簡単に是非善悪を論ずるのは聊か公平を欠くものではなかったかと思われるのである。ある人がこの事件を評して「ボタンの掛け違いによる不幸な事件」と言っていたが、まさに明言である。誤解に基づく世の一部の人たちの悪評に対して一言も弁解されなかった篠田氏のご心中は如何なものであったのか、今と祈るのみである。（村木潤次郎）

行かれた。ビルゲ先生と私はなお一時間余り登り、そのまま登ろうかと言われたが、とんでもない私の足は動いてるがもう頭は眠っているからビバークしてと頼んだ。岩かげで寝袋に入ったが、真上にスバルがきらめいていて寝付けそうもない。もったいないがヤッケをかぶってしまふ。二時間もするともうおこされた。素晴らしい御来光だ。

雪渓をいくつか越え岩がガラガラした沢を登る。去年下りた隣の沢だ。草がちよっとついた岩につかまり辛じてバランスをとりながら登る。私は調子がありよくなく三時間苦闘の末やっと稜線にでた。このひどくやせた尾根を、去年私は風に吹き飛ばされそうになりながら登ってきた。荒涼とした山肌と下の谷を見てまさに月の世界だと思ったものだ。谷に下りれば雪渓の水も流れ、花もたくさんあるのだが。去年私の前に立ちはだかった岩をまく。とても悪いが遮二無二トラバースして再び稜線にで、頂上に着く。ちよっとザイルのいる岩場だった。

この登山の後私は黒海に出、三日かけてカチカル山系に入った。樹木がふえてきたら忘れていた汗も吹き出した。リゼの先チャムルヘムシンを経てチャットの村に着いた。アルプのような所で村人はお茶や食事をすすめてく

れた。翌日一人でバロッシュ(三四五八畝)に登った。三分の二は草付き、残りが岩の斜面で下が見えないほど急な所もあり目が廻るので、下を見ないようにした。それでも無事登ることができ、前日から待たせておいた車で一路黒海に向かった。道は清らかな流れの川に沿い、断崖には幾筋もの滝が懸り日本を思わせる風景である。でも私はあの荒々しい岩肌のエルジェス山が星空と共に忘れられない。

〔短歌〕

立山・劔岳秋立ちぬ

大谷 優

石群れを分けて咲きたるイワツメの小
さき花びら白くただずむ

劔岳雲の切れ間にそびえ立つ岩肌荒く
われに迫まれり

青春の山劔岳還暦の我れに優しく相い
まみえたり

音立てて水の流るる劔沢白き雪溪夕日
に光る

いただきに雑草もなき山さびし名にふ
さわしき劔の山よ

天に向け沢立ちあがる山深き後立山は
るか連なる

汗かわき塩の吹きたるほほなでただ
に見つむる劔岳なり

秋立てる山はかなしき色に満つみどり
くれない黄色に染まり

立ち枯れてむらさき色保ちいる大日
岳のりんどうの花

花咲きて花ならむ花大日の山につぼみ
のりんどう悲し

(九〇・九・二二―二四)

照さんの思い出

ムクチナートだより――

禁酒の禁を破られる

山本朋三郎

酒の好きな照さん、ホテルを抜けて
てチベット部落の顔見知り、チベッ
トラム酒の杯を重ね、太鼓腹を両手で
抱える様にして十二時近く御帰館。太

きなハアハアと酒臭い吐息と、気を
使って閉めるドアの、案外大きな音
で睡眠を妨げられる。まあ、照さんが

旧知のチベタンと国際交流の日本代
表としての活躍と思えば、不快がら
ず、寧ろ彼の努力に拍手を送らねばな
るまい。再眠。四種類の小鳥の鳴き声
で目覚める。

ポカラからジヨムソンへ小型機で出
発。オヤ！見覚えのある土饅頭の様な

尾根のコブだ。機は低くノードラの上
を飛ぶ。隊商の小馬の紅色の飾りが印
象的である。鮮やかな紅色の飾りに感
心しているうちに、真紅のシャクナゲ
が、ゴラパニの山腹に点在。小型機
の中で右に左にと目が忙しい。三原山観
光案内の姉さん被りの、椿を染め抜い
た手拭の瑞々しい紅色の様に、思った
よりも大きく、シャクナゲの花が窓越
しに見える。

タトパニを過ぎた頃、小型機は大き
く旋回。ダウラギリI峯のヒマラヤひ
だに向かつて突進。何とダウラギリの
東壁スレスレにサービス飛行。同乗し
ている国王の相談医の早田教授への
サービスか。何はともあれ窓にしがみ
つくが、ああ！もつとプラスチックガ
ラスが透明であつたらんと、悔しがる
事しきり。アツと言う間にジヨムソン
に向け機首を正して河原の空港に安
着。

シャン・コアラ(外国人としては初
めての入山)から、タパ・ピーク(六
〇三五畝)初登攀を狙う早田教授隊。
この登山隊のチャーター機には自社の
カレンダーの写真を撮りにきている早
大元老の今井友之助氏の班。気儘に画
になる地点でキャンパスを拡げにきた
立大OBの大沢画伯。一路ムクチナ
ートへ行く私。レテからツロブギンへ行
く照さん。

五つの隊を取り仕切るヒマラヤ旅行
社の宮原純社長直々の大奮闘。食料・
器材の配分、シエルパ・ポータの紹介
のため、取り敢えずシャン・コアラと
カリ・ガンダキの合流地点近くにペー
スを張る。外国人が初めて入ったシャ
ン・コアラの上流に、未登攀の白い尾
根が輝き、カリ・ガンダキとの合流点
の空には、高く高くニルギリの中央峰
の左右に、N峰、S峰の特徴的な尖峰
とヒマラヤ装が美しい。

シャン・コアラの河原の岩影を何気
なく求める様に動く姿は、ネパールに
きて早くも下痢の始まった連中であ
る。翌日、結局私の馬の旅に照さん、
大沢さんが加わる。急いだところでど
うにもならず、腹が減っては力も出ま
いと、タツプリと馬のカイバの食い終
わるのを待つて馬の背になる。カリ・
ガンダキの河原を砂を噛んだ風に追わ
れ二時間で城塞の村カクベニに到着。

カクベニから先は治外法権のムスタ
ンで外国人は入れない。村全体が、昔
の領主の石と泥で固めた城を中心にし
て、迷路を作り堅固な城塞を作ってい
る。博学な照さんによると、カクはチ
ベット語でブロックを意味し、ベニは
ネパール語で川の合流点のこと。成る
程、カリ・ガンダキとムクチナートか
ら流れる、ジヨン・コアラの合流点の
川洲の突先に出来ているのがカクベニ

村である。

川の合流点をネパール語でテイタル、川の中洲を英語でデルタ、日本語で合流点をデアイ、何か洋の東西似ている様な気がする。昨日、ムスタンラジャーが部下を連れてカクベニを通った際、村の酒を買い漁ったとかで、照さんの晩酌のロキシ(焼酎)がないとコボし切れない。砂漠でラクダは水の臭いを探知すると言う。酒好きの照さん、どこで探してきたのか既に二、三杯腹に入ったらしく御機嫌。バッテリーの屋上で暮れ行くニルギリの美しさを眺めている私の静かなムードが、上がったきた照さんで壊される。

「朋さん、一人での酒はどうも美味くね。付き合いなよ。」

あまり酒を飲まぬ大沢画伯も付き合わされている旨を告げる。昨年のクリスマス以来禁酒禁煙を守っている私のことは既に承知の照さん。どうせ守れっこない禁酒禁煙なんて止めなよ。酒は美味いよと。樹下の仏陀も苦しい誘惑と戦ったであろう。

「二人で飲みなよ」

と私に言われシブシブ階下へ戻ったが、しばらくして

「美味いよ、ハイ朋さんの分だよ」と、コップのふちから輝く水滴をポタポタ落しながら、美味そうなロキシを置いて行く。魅惑の美酒の誘惑

に一分と掛からぬ、喉仏ゴックンで終わる。(昭和五十九年六月三十日)



図書
紹介

東北百名山

東北山岳写真家集団編

代表者の早川輝雄氏と同人の斎藤善雄氏と面識があるだけで支部長から小生に書いてくれということになった次第である。

この本は実業の日本社が企画している旅行ガイドブックの中でブルーガイド版があるが、その類と解釈されても良いであろう。一般ハイカーのハイキングガイドブックとして企画された出版物と思う。

その意味では百名山の名は付けて欲しくなかったタイトルであり、商業ベース上やむを得なかったのかもしれないが、全国どこに行っても百名山で、小生などはいささかうんざりしている次第である。

ただし、百山の内、二十数山は小生も行ったことがない山名もあり、東北に住んでいても、なかなか百山全て登

頂している方も少なからうと思う。

歳を取るとともに、登山コースの整備された歩きやすい山旅も、また良いのではないかと感じるこの頃、登山を目指す者には役不足かも知れないが、JAC会員の平均年齢にあったガイドブックとして愛用されたい。

二、三注文もある。一つは山名についてである。山名の振仮名は極力付けないで欲しいものである。ほとんどが後で意味も判らず勝手に読まれている場合があり、実際現地でも昔から呼称されている山名とかけ離れているからである。また、別名もタイトル山名と同じ大きさにはっきり明記して欲しいものである。さもないと何時の間にか山名が変わってしまう時があり、出版物に載せる時はとくに気を使っていたきたい。

早川氏は東北電力の社員であるし、また斎藤善雄氏も高校の教員で、その他も公務員等で構成されているメンバーであり、アマチュアカメラマンの愛好者集団で、写真で飯を食っている集団でないことを、お断りした方が良さだろう。さもないと地元でこつこつと地味に活躍しているプロの方々に失礼になりますので。(プロの会員が入会しているか確認していないので若しくは小生の思い違いの時はお詫び致します。)

もう一つは、今まで彼等の山岳写真を三度ほど拝見したことがあるが、もう少し山に取り組んでいる生き生きした山岳活動写真が展示されていたように記憶するが、なぜその写真が使用されなかったのか疑問でもあり、マンネリ化された風景写真のみが写っていたことがいささか残念である。

一九九〇年七月一日 山と溪谷社刊
変形B5判 一六七ページ 定価二〇〇〇円 (佐々木豊喜)

山と風と

加藤達三郎画集

加藤達三郎著

山に行く古い人なら住友山岳会のことを良く知っていると思う。どちらかと言えば財閥解体前の住友本社に入社した人達の中に登山の好きな方が多かった。一九五五年から五八年まで、日本山岳会長を務められた別宮さんもその一人である。

これ等の人達の中には、山行の傍ら、絵に親しんでおられた人が多かった。今はいまう皆さん長老になられている。加藤さんが山を歩き初めたのは、最近のこの様に思う。山や自然を描きたいために強く山を求められたものと思う。「山と風と」の表題はいかに加藤さんらしい表題で、自然を渡っ

て行く風のような生き方が作品の中にも表れている。自然感あふれる深く、強い山の印象を柔らかいタッチで描き上げている。

この画集からは、山を描こうとする誰でもが直面する、描く事の貧しさを自然を通じて学ぶ迷いのようなものさえ感ずることができるようになる。実景をそのまま描いているものが多いが、実景をそのまま素直に描く画風こそ評価すべきであろうと思う。

「メドウの夜明け」「ゴッゲ レイク」など、榊井一夫画伯に師事した作者の心が表現されており、私の好きな作品である。

また、この画集には、カナディアン・ロッキーの山々や北アルプス、六甲山麓等の風景が多いが、後の頁に納められている婦人像や静物等も、印象深い一枚である。

平成二年 岡村印刷出版 頒価二七〇〇円 (平林克敏)

マッキンリー山田隊 極北の烈風に死す

遭難対策本部編

「あの山田さんたちにかぎってまさか」

遭難の第一報に接したとき、だれもが抱いた感慨ではないだろうか。

一九八九年二月、冬のマッキンリーに挑んだ山田昇、小松幸三、三枝照雄の三氏は、頂上に向かったまま消息を絶ち、後に遺体で発見された。今さら言うまでもないが、山田氏はヒマラヤに十四座ある八〇〇〇峰九座に十二回登頂、それもエベレストをはじめ冬期三座登頂の実績をもつ、まさに日本を代表する登山家であった。山田氏だけではない。小松氏はダウラギリ山群全山登頂の実績をもち、三枝氏は最近の十ヵ月で八〇〇〇峰四座に登頂するという若手のホープだった。これだけヒマラヤ登山に豊富な実績と経験をもつ三人が、マッキンリーで力尽き、不帰の人となってしまうのである。冬のヒマラヤならまだしも、遭難がにわかには信じられないのも無理はなかった。

本書はその遭難報告書である。一部「鎮魂のオーロラ」では、三人に同行しランディング・ポイントで彼らの帰還を待った佐藤俊三氏の日誌、遭難の連絡から捜索隊の派遣、遺体の発見・収容、そして遭難報告会に至るまでの三ヵ月の出来事が当事者により報告されている。それだけに生々しく、また読む者の心を打つ。

しかし、この本は、三人の死を悲しみ、追悼するためだけにまとめられたものではない。それは二部「悲劇を乗り越えるために」、三部「マッキンリー登山資料」と読み進めるに従って明らかになる。故人にゆかりの人々の追悼の辞のかわりに、山田隊の遭難の原因を考察し、なおこれまでの遭難をも分析、冬のマッキンリーの特殊性にまで言及しているからである。そこには、彼ら三人の死の悲しみを乗り越えて、二度とこうした事故が起きないようにとの、はっきりとした意図が読みとれる。

「あの山田さんにかぎって」にわかに信じがたいこの思いも、それが北緯六三度にある冬のマッキンリーであればと、厳粛に受け入れざるを得ない事実なのかもしれない。八四年二月、植村直巳氏も消息を絶った冬のマッキンリー。六一九四峰という高度だけでは推し測れない極北の山の厳しさを、改めて考えさせられた一冊である。

一九九〇年六月二十五日 東京新聞出版局発行 二〇八頁 定価一九五〇円 (神長幹雄)

女の山歩き山登り

女性登山家45年の

知恵と体験

小倉董子著

輝いている女に出会えた時、「ああなんて素敵なんだろう！」と私は声を

かけたくなってしまう。それは、その人が充実した生き方をしているから人に感動を与えてくれるのである。う、と筆者はあとがきに書いている。かくいう筆者自身、大変魅力にあふれ、充実した生き方をし、輝いている女である。

登山家、「女性のための山歩き教室」の講師、文部省登山研修所運営委員を務め、昭和三十二年から、キリマンジャロを初め、ニュージーランド全島、南米縦断、東欧、サハラを女性だけで走るというアドベンチャードライヴ、世界各地の山登りやトレッキングを重ねてきた中で、人や文化、動植物とのふれ合いや素晴らしい出会いから学んだこと、山や人を大切にできたこと、女性として家族を慈しんできたこと、全てが、彼女を魅力ある女にしているであろう。

本書は、『女性登山ガイド』一九六一年刊『女性登山教室』一九七六年刊に次ぐ三冊目の著作である。十五年に一冊、この周期の間に世の中も、女の立場も、女の山登りも大きな変革を遂げてきた。そのなかで共に歩き見届けてきたなかから、①女には女の山登りがあるのだらうかと筆をおこし、②女の特性とウィークポイント、③年齢によって変化する山とのつき合い方、④身を守るポイントとバテない知恵とコ

ツ、⑤こんな時どうする山でのマナー、⑥山歩き山登りで生きることが楽しくなる、⑦わが半生、と山と人の素晴らしい出会いを語っていく。女性独特の細かな心づかいや気づきが随所に書かれ、初心者にとっては、親切な入門書であり、山登りを続けてきたものにとっても、ふと、おろそかにしていたことを思いおこさせ、初心をとり戻させる書である。男とか女を超えた一人の人間として素晴らしい生き方をしてる筆者の「知恵と体験」は、人生の後輩であるものにとっては、その生き方に力づけられ学ばされ、励まされるものがある。女の……、という裏には男性があるわけで、タイトルに関係なく、世の男性にも是非読んでいただきたい書である。

一九九〇年七月十日 山と溪谷社発行 二二二頁 定価八〇〇円

(細井澄子)

ヒマラヤ

巨峰十四座と高峰

内田良平著

著者・内田氏について、いまさら紹介の必要もあるまいが、日本山岳写真集団の代表として幅広く活躍しているプロの山岳写真家であり、また登山家でもある。

(自然保護随想)

自然保護とマスコミ

私が最近自然保護で特に嬉しく思ったのは、一九九八年に行われる冬季オリンピックのアルペンスキー滑降コースを、岩菅山に新設しないで、八方尾根など既存のコースに代えたことです。

このことは、まだ荒らされていない岩菅山のオオシラビソなどの原生林が保護されたことになりましたが、単に岩菅山だけの問題ではなくて非常に重大な意味をもっています。

森林保護は自然の原生林のままで保護しなくてはならないからです。

これは自然保護団体の活動だけではなくて、テレビや新聞等のマスコミュニケーションの力が良い意味で人々に作用して、原生林の自然環境を守ったと言っても過言ではないと思います。

著者のヒマラヤ通いは二十余年にわたるといふ。その間撮ったフィルムの枚数は、日本の山よりはるかに多いそうだ。

一口にヒマラヤといっても広大な山域、著者はブータン、中国、ネパール、インド、パキスタンにいたるまで撮り歩き、とりわけネパールヒマラヤへは三十数回に及ぶ。これらすべての山域に足を入れ撮影してまとめたのが、この写真集である。

それほどにマスコミの影響力は大きく、自然保護に關しての知識の豊富な人が多くなりました。

ヒューストンサミットの経済宣言の中の環境の項でも地球規模の森林保護をうたい、また、森林条約が森林再生技術の教育、訓練を重視して一九九二年にブラジルで開く国連環境開発会議までに締結を予定しています。

さて、森林保護、自然破壊を守るためには何をしたら良いのでしょうか。

私は山を自分の足で歩き、山を自分の眼で見て、山を自分の心で感じるのだと思います。

山歩きの回数が増すにつれて、今まで見えなかったものが見えてくるはずですよ。そして嬉しさも、悲しさも、怒りも自然と心で感じるようになります。

会員の西丸震哉氏の話に登りたい山、守りたい自然があったら「のんびり構えてないであと数年の余命を思い計画、実行し」て、自然保護努力をすれば、美しい日本の自然を次世代に残せるのではないのでしょうか。

(梨羽時春)

これまでヒマラヤの写真集は数多く出版されているが、この写真集には、ヒマラヤ巨峰八千四百十四座全部が収められている。一個人の写真集としては内田氏が初めてである。

山岳写真は、同じ山にいく度も訪ねてもその山が全く違う写真となる。そこが山岳写真を撮る妙味であり、また難しさでもある。二十余年余りも撮り続けた作品には、さすがに秀作も多く、それぞれのヒマラヤの特徴をよく捉

え、また巨峰の厳しさ、美しさを見事に映像化し、それに中・大型カメラによる描写が作品としての質を高めている。また記録的に見ても貴重な写真も多くヒマラヤを知る恰好な写真集でもある。

ともあれ、著者のヒマラヤに寄せる執念と創作活動には敬意を表したい。

巻末の「ヒマラヤ展望」と「データ」などは写真集としては、蛇足ではあるが、ヒマラヤを指す山岳写真愛

好者にとっては、参考になろう。

平成二年五月 時事通信社刊 二六
二×二九〇ミ 一〇八頁 定価四五
〇〇円 (羽田栄治)

報告

日山協との懇談会

本年五月の日山協創立三十周年記念パーティーの席でも話題になり、また本年の通常総会の席でも山田会長より、国内の他山岳団体との交流も計りたい旨の説明がみられたが、十月十六日のHAT-Jの発会式等の協力態勢を踏まえて、遅ればせながら、本会、日山協とのトップ会談が実現した。

すなわち十一月八日(金)、午後六時半、会場の中村屋のレザミには、日山協、JAC共に五名ずつのメンバーが会合し、楽しい懇親の場がもたれた。

話題は最近の登山界全般に亘り、中高年登山の話題としては、ネンリンピック、福岡国体での人工壁登攀、フリークライミング等、広範囲に亘ったが、特に、自然保護、遭難対策の問題については、共通の話題も多いということに近いうちに、双方の委員会の合同会議を持つことが提案され、なごやかな中に懇談の会を終了した。

出席者 本会―山田会長、村木、藤平両副会長、松田常務理事、神崎海外担

当理事 日山協―鎌田会長、斎藤、沢村、石塚各副会長、国見常務理事

(Y・M)

会員懇談会

新入会員歓迎会

総務委員会

今春以降の入会者を対象にした会員懇談会が十月五日、本会ルームで開催されました。新しい会員を対象にした行事としては、毎年三月にオリエンテーションが開かれていますが、新会員に一日も早く本会になじんでいただく趣旨で、昨年からの十月に懇談会を開催しています。

新会員三十九名が参加して開かれ、山田会長の挨拶、松田常務理事から会の現況等についての説明と諸行事への積極的な参加の呼びかけがあり、次いで中川武会員が、この一年間の本会の主要行事を写したビデオを三十分に編集して、液晶ビジョンで披露した。

山田会長の音頭で乾杯して懇親に移り、時間が経つのも忘れて楽しく歓談した。参加者の最年少は十七歳、高校三年の久保匠哉さんで、将来の永年会員間違いなしとあって、中高年会員を羨ましがらせた。

出席新入会員 川上進、西方昇、兼岩良保、藤田友生、佐藤芝明、中川尚、

伊藤裕泰、織田沢孝全、坂尾藤江、鈴木捷夫、久保匠哉、武内敏男、中井修二、増田達治、濱崎和巳、依田美恵子、荒山孝郎、秋保一郎、榎葉華子、原利恵子、鶴田稔、津田和巳、千田武久、新村貞男、塩田裕通、山口光子、燕昇司実、小田和美、石光久仁子、高寺紀子、野田尚志、浅尾純、染谷美佐子、高木康雄、高橋重雄、近藤雅是、山口善弘、大金麻里、大島陽

(総務委員会 藤田礼子)

石間さんと山歩き

昨年と一昨年の二回にわたった石間さんの講演会につづき、今年は「石間さんと山歩き」小集会がもたれ、石間流山歩きのお話を聞きながら一日山を歩こうと九月三十日「子持山」(二九六・四〇〇)登山が行われた。

前日の二十九日は、石間さんと集会委員・有志八名で「三峰山」(一一二二〇)登山を行った。深夜現地への移動のため全員睡眠不足にもかかわらず無事登頂し、明日の「子持山」登山にそなえ、高山村国民宿舎「わらび荘」に宿泊した。台風二〇号の接近で天気は下り坂、明日一日なんとか天気をもってくれることを祈りながら就寝。

九月三十日朝五時半頃電話のベルで起された。東京の女性会員の方から天

候不良のため四名の方が中止するとのこと、次いで六時、六時半頃次々と連絡の電話、東京方面も台風の余波らしい。こちらも小雨。

八時四十分二台の車に分乗して本日の参加者を渋谷駅へ迎えに行く。

やはり台風の影響で大半の方が中止された。それでも四名の方が元気なお顔を見せられ、総勢十一名となりただちに出発。十時三十分頃登山口に到着、雨もやや本降りになってきたので完全装備をし、石間さんを先頭に元気よく出発、岩の多い急坂をゆっくり登る。眺望は全然駄目、ただ黙々と頂上をめざして登る。

十一時四十五分頃大黒岩一〇〇二附近を通過する。途中五分位の小休止を数回入れ、十二時四十五分雨の頂上に着く。雨と汗に濡れた顔にホッとした表情で三角点の周りに集まる。

赤ペンキを塗られた一等三角点標石が自然石に囲まれて鎮座していた。

石間さんはいつものように持参のウイスキーを三角点標石に捧げ、標石の頭を撫でて全員の無事登頂を感謝されていた。同行の皆さんも石間さんにならって標石の頭をそれぞれ撫でて、雨の中での無事登頂を喜び合っておられたのが印象的だった。

雨と汗で全身濡れぬずみのため十分位で頂上を出発することにした。

この頃になると雨足もひどくなって台風の接近を思わせたが、意外に風が静かで幸いであった。雨に濡れた急坂は滑りやすく登りより大変だった。

二回ほどスリッパして転んでしまった。途中ライオンの横顔にそっくりな大きな獅子岩が黒々と荒天をバックに雄々しい姿を見せていた。さらに下り十四時二十分頃巨大な屏風岩の下に着。上の方がオーバーハングになっていて雨宿りには絶好の場所であった。雨具を脱ぎザックを開いて漸く遅い昼食をとる。やっとくつろぎ賑やかに

なってきた。和気藹々の中に雑談や石間さんのお話が出て暫くの間雨が降っていることも忘れさせた。天気さえよければ「石間流山歩き」の話をもっと聞きながら歩けたのに残念であった。

全員での記念写真も撮り終え、十五時十五分雨の中を全員無事下山し再び二台の車に分乗して渋川駅に向った。十五時五十二分発特急上野行きに乗りうじて間に合い、お礼の挨拶もそこそこに皆さんにお別れする。東京駅では台風による新幹線不通のハプニングもあったが、鈍行で深夜何とか静岡に帰着した。さすがの石間さんも大分お疲れの様子で、帰宅後風邪のため少し体調をくずされ暫くドクターストップ。

何と言っても七十六歳のご高齢、充

分気をつけられて来年の喜寿と二千五百回の山行祝を元気に迎えて戴きたいと心から念じてやみません。

最後に二日間にわたって私達参加者の足となって、気持ち良く車を運転してくださった神山氏、嶋崎氏それに今回のリーダー藤田さんの並々ならぬご苦勞を心から感謝いたしております。集会委員の皆さん有難うございました。
(久米 實)

報告

三水会創立十五周年

記念祝賀会と記念山行

早いものです、新しい三水会ができて、十五周年を迎えることができました。

十月十九日、神楽坂の教育会館で、記念式典祝宴を挙行することができたことは、まことに発起人の一人として実に嬉しく、感無量のものがあります。式典の部は、高田眞哉さんの司会のもと、第二代代表齊藤健治さんの開会の辞にはじまり、日本山岳会山田会長の祝辞、坂倉登喜子さんの三水会の流れについて話があり式典を終了。記念撮影後、祝宴にはいった。

司会も中にかわり、雰囲気なごやかにするために、女性の先輩である今井喜美子さんによる挨拶、長老・山口

一孝さんによる乾杯、初代の代表である沼倉寛二郎さんが病気で出席できず、子息の寛さんが参加してくれたので、ひとこと頂戴して宴会にはいった。

会場の盛り上りの一段落を見て、今回のために、会場の準備、苦勞して作った十五周年記念誌の功勞者・片岡博さんに三水会の思い出を、そしてこの日のために神戸の出張先からかけつけた発起人の一人・西丸震哉さんから三水会発足当時の思い出話、温泉の旅で有名な美坂哲男さんから三水会について、山岳会総務担当常務理事・松田雄一さんからは東京支部がなくなり、山岳会が日山協に併合されて、東京山岳連盟の傘下に入っていたいきさつから、新しい三水会ができた喜びなど楽しく話された。

勝田房治さんからは記念品の事や、記念山行の事のお知らせなどや、欠席された人々の近況の紹介もあり、会は非常に盛大になっていったが、時間の都合上、最後に山男の唄の合唱、手拍子による手締めにより、九時三十分、お互い喜びを胸に、三々五々、散会となった。

三水会の記念行事が無事終了したことは、皆様方の協力のおかげであることを肝に銘じて、二十周年をめざして出発していきたいと思えます。有難う

ございました。

参加者 山田二郎、秋山光平、浅野孝一、荒木正弘、荒野康子、石田稔郎、乾能尚、今井喜美子、岩堀瑞子、宇津力雄、内田耕作、内山城、大野盛彦、岡野修、岡野谷誠、小川光則、奥徳子、織内信彦、加治川栄二、片岡博、勝田房治、川上光久、川嶋新太郎、川俣俊一、菊地文雄、木村俊博、河野幾雄、河野之保、小林碧、齊藤健治、齊藤直信、坂倉登喜子、坂本正智、佐藤恒雄、塩沢厚、進藤波男、関清、関塚貞亨、妹尾幸雄・律子、高田眞哉、高橋早苗、滝沢ちよこ、田久保勇治、田中恵美子、千葉保之、遠田栄、富田弘平、鳥居亮内藤勇、中保、中村久美子、中村小一郎、西丸震哉、沼倉寛、原謙一、原田衛、橋本雅子、早川瑠璃子、樋口公臣、平沢哲臣、平戸孝夫、平野武利、松田雄一、松丸秀夫、美坂哲男、三宅次郎、宮下啓三、望月達夫、森川洋佑、山口一孝、山崎直人、横溝修一、吉武玲子
(中 保)

日本山岳会三水会は今年十五周年を迎えたので、記念山行として景信山を目指し、去る平成二年十月二十一日、秋晴れの陽光輝く朝、午前八時頃中央線相模湖駅に集合した。人員点呼の後一行二十七名は、線路を渡って反対側の与瀬神社の階段を登り、境内で休んだ。



三水会創立15周年記念祝賀会

仲秋の奥高尾登山道にはノギク、アザミ、ミズヒキソウなどの残花が秋の名残りの色彩りをとどめて、吹く風も爽かな感触で快く肌に触れる。

時折り岩の道が急になるジグザクの登りをゆっくり登り、少し道が歩きよくなった頃、車道が藤野方面に通じる鞍部を横切って僅かに登ると明王峠に着いた。

ここは奥高尾縦走路に出合う尾根上で、茶店がありひと休みする。

ここから右折して平坦な道に入ると

歩き良い道が暫く続き、やがて林を抜けて階段をひと登りすると景信山頂に着いた。頂上でヒマラヤのタンポチェ僧院再建募金のための絵葉書売の杉並区役所山岳部員に会い、募金に三水会有志が協力した。

日本山岳会でも募金に応じたが、私も前にタンポチェ僧院を訪れた一人として再度の寄付をすることにした。

あたたかい陽さしの山頂に全員揃って祝杯をあげ、記念撮影をした後、昼食をとり、午後二時一応リーダーから解散の挨拶があつて下山した。

好天に恵まれた楽しい記念山行は無事終了し高尾駅より帰途についた。

参加者 乾能尚、岩堀瑞子、内山城、岡野修、小川光則、片岡博、勝田房治、河合文恒、菊地文雄、木村俊博、河野之保、斉藤健治、坂倉登喜子、佐藤芝明、重村清、高田眞哉、高沢佐恵子、滝沢ちよこ、遠田栄、中村久美子、早川渥、原謙一、樋口公臣、平井拓雄、平戸孝夫、水村通子、吉武玲子

(坂倉登喜子)

紅葉に彩られた

宮崎ウエストン祭

宮崎支部

第六回目を迎えた「宮崎ウエストン

祭」。今回は、ウエストン祖母登山百周年・地元高千穂町制施行七十周年記念として、例年にない参加者でにぎわった。東京から松田雄一常務理事ほか四人、権藤太郎福岡支部長・奥野正亥熊本支部長・梅木秀徳東九州支部長(代理)ほかの出席で大輪の花を添えていただいた。標高八〇〇㍎。晩秋の三秀台(祖母・久住・阿蘇の三峰が望める高原)から仰ぐ祖母山は雲一つなく、六合目から頂上にかけて着色された絵のように紅葉が映えていた。

英人牧師ウオルター・ウエストン師は、日本アルプスに初登山する前年の明治二十三年十一月六日に五ヶ所高原から祖母山(一七五七㍎)に登った記録が、五ヶ所の「矢津田日記」から昭和三十年後半に確認された。同四十年三月「祖母・傾国定公園」に指定されたのを機会に同四十一年十一月六日、ウエストンのレリーフを配した記念碑の除幕。同四十七年五月二日、地元北稜山岳会が中心となって懸鐘式を行いウエストン碑が完成した。同六十年十一月三日、日本山岳会宮崎支部発足を記念し高千穂町と共催「第一回宮崎ウエストン祭」を開く。

祭典は、五ヶ所小学校六年田上幸生君と高松樹里さんが高さ八㍎のウエストン碑に掛けられた点鐘を打ち鳴らし開会。県内外からの参加者約二百人

が、ウエストン師をしのび山岳遭難者を悼みつつ登山の安全を祈る黙とうをしたあと、五ヶ所小学校六年立本孝治君と甲斐かおりさんが碑に花束をささげた。甲斐敏常高千穂町長・来賓挨拶、英国大使館のメッセージと日本山岳会ほかの祝電が披露される。

日本山岳会代表、松田雄一常務理事の「山岳ミニ講話」は、ウエストンの足跡と業績、人柄、山への愛から近代登山の歴史に及び参加者の感動と共感を浴びた。このあと、ウエストン生家から贈られたヨークシャ石の埋め込まれた記念碑裏側にウエストン祖母登山百周年を記念しての経緯碑文除幕と朗読が行われる。引き続き、本城武宮崎支部員指揮によるホルン(川崎正)、アコーディオン(山口昭夫)伴奏で「エーデルワイスの歌」「雪山賛歌」を合唱。万歳三唱で祭典は終了。

紅葉いっぱい祖母登山・高原での大声大会・特産のそば早食い・追跡ハイキング・記念ゲートボール大会・各種バザー・特産品展示即売など楽しみながら出会いと交流を深め平成三年の再会を約束した。

「ウエストン祭」前夜祭寸描

前夜祭の始まる寸前、十五夜の月は祖母頂上右肩に大きく浮かび上がってきた。特設された舞台上に祖母嶽神社宮司により「神事」が執り行われる。さ



宮崎ウエストン祭風景

ながら神代の世界。念のこもった祝詞（のりと）が心に染みる。

式典のあと、五ヶ所神楽、高岩棒術、田原の楽など郷土芸能が披露された。高さ三メートルの豪華なキャンプファイヤーを囲み、バンド演奏、合唱、民謡、カラオケ、フォークダンス、星空教室など盛りだくさんの楽しい集いが満月の中で続く。なかでも、五ヶ所小学校全校生三十七人のジェスチュアを交えた合唱は印象的。三百人余の参加者から大拍手が贈られる。前夜祭は、人それぞれに思い出を刻み生きている喜びを実感した。

今回から参加した五ヶ所小学校児童たち一人ひとりにとって、「宮崎ウエ

ストン祭」は忘れることの出来ないかけがえなき「ふるさとの風物詩」。いつまでも語り継がれ「我らが誇り」のウエストン碑は守り続けられてゆくことだろう。

月さえて十五夜祖母の山照らす
燃ゆるくれない稜線に消ゆ

参加者 松田雄一・柳子、神崎忠男、藤井正彦、中條昌子（東京）、入谷浩右（関西）、権藤太郎、吉村健児、小野一丸、田代実（福岡）、奥野正亥、本田誠也（熊本）、阿南寿範、合澤昭憲（東九州）、佐藤光俊、大谷優、魚本定良、大谷セツ子、日高万喜男・寿々子、宮下広次、蓑原重夫、吉岐典子、本城武、川田盛人、児玉信子、高岩俊昭、古市幸子、服部敬二、松山斉・タエ子、荒武八起、宮内貞子、黒木眞規子、荒武トモ子、図師睦雄、川崎正、山口昭夫、図師裕子、宮下靖子、佐藤常生、佐藤ケイ、川瀬秀子（宮崎）。

北海道初秋山行・お月見集会

十勝連峰「十勝岳・富

良野岳」

北海道支部

今年の紅葉は例年より早く、大雪・十勝の頂稜は既に終わり、中腹のミネモミジ・ナナカマドが深紅に輝き、岳カンパの黄、緑濃い這松のコントラス

トも良く総て見ごろになっている。

北海道支部恒例のお月見集会と初秋山行を抱き合わせに九月二十九日十勝岳温泉「凌雲閣」に札幌・旭川、函館とさらに遠く東京からも岳友が集い一行は二十四名となった。一次会は大広間の舞台にススキ、萩を活けてお月見ダンゴを盛り、旭川の渋谷氏手製の月と白兔を飾り、窓外にはキタキツネが三匹やってきて仲間に加わり、宴会は夜の更けるのも忘れて賑わった。このあと部屋で二次会をする者、露天風呂で月を賞でる者、はや床につく者とそれぞれに明日の好天を願った。

三十日六時起床、既に幾人かは露天風呂で昨夜のアルコールを流している。標高一六〇〇から上は雲がかかっていて可なりの強風の模様なるも、温泉付近は朝日に輝き、素晴らしい朝を迎えた。七時四十分出発。予定どおり三段山・大砲岳・十勝岳本峰・上ホロカメトク山へ向かうA班と、上ホロ分岐・富良野岳・三峰山へ向かうB班とに途中で別れたが、A班はB班からの引抜きにあい六名となり、B班は十四名で編成された。

A班は、三段山からNに降る岩場で東南東から吹き付ける強風に悩まされ、さらにOP尾根の痩せ尾根では冷や汗をかきながら十時〇分主稜線の大砲岩に着いた。稜線上は風雨が激しく

全員雨衣やヤッケに身を包み、濃いガスの中を十勝岳本峰に向かった。本峰には十時五十五分に着いたが、視界はゼロ、気温は五度、長居は無用とそこそこ下山する。予定どおり上ホロカメトク山に十一時五十分に着き、さらに進んで温泉分岐の岩陰で風を避けて頂上ビールと昼食をとる。

B班はやはり予定どおり上ホロ分岐から富良野岳を目指したが、風雨が強く富良野岳頂上に十時四十分に着いたが、立っていることもできない程の風雨に会い、すぐ下山となる。三峰山經由のコースは取りやめて上がってきた道を引き返す。途中で昼食をとり、辺りの紅葉を眺めながらゆっくりと下山する。十三時十分先に降りているB班が、A班がDを降りてくるのを見付けてZの地点で待っていてくれたのは嬉しかった。全員揃って十三時三十分無事十勝岳温泉に着き、小須田支部長の挨拶と山行担当の総括を終えて現地解散となった。十勝岳温泉付近は車、車・人、人でいっぱい、帰りにもう一度露天風呂に入ったが、これも芋を洗うがごとし、しかし満足の初秋山行であった。

参加者 石崎良子、遠藤恵大、大久保五郎、岡本力、亀井秀子、木下恵子、工藤幸代、久保田優一、小須田喜夫、澤田良子、渋谷正己、高澤光雄、竹内

会務報告

勉、中嶋英彦、野田四郎、芳賀孝郎、芳賀淳子、橋本誠二、平野明、藤野和男、水科行雄、柳田凉子、山上郁子、横内泰美
(水科行雄)

評議員会

平成二年十一月七日十八時半
場所 本会会議室

出席者 山田会長、村木、藤平両副会長、小倉、平林、大島、嶋原、橋本各常任評議員、広羽、杉野目、沢村、今西、吉村、大塚、室賀、奥原、井上各評議員、松田常務理事
〔委任出席〕大森常任評議員、山野井川上、日下田、佐藤の各評議員

議事
定款第二十六条による定数確認後、定款第二十五条二項に基き、議長として嶋原常任評議員を選任後、議事に入る。

第一号議案 名誉会員推薦の件

常任評議員会で、事前に候補者の調査を行ったが、本年度は、特に該当者なしとの説明があった。これに対し、地方支部選出の評議員等の意見を求め、種々検討の結果、本年度は該当者なく見送ることに決定した。
なお参考意見として次の意見が出た。

・高齢化に伴い、名誉会員推薦の年齢のバーを八十歳以上に上げては如何かとの意見もあるが、年齢のバーは設けるべきではない。
・有資格者(在籍四十年以上)のリストアップを行うべきだ。
(注)平成二年十一月現在二〇五名が在籍している。

・名誉会員制度とは別に、その年のすぐれた登山をした者を表彰するような制度を検討して欲しい(大塚)。
第二号議案 その他
本年度永年会員になれる方は次の六名である。

奥野正亥(一八一八)、杉本義信(一八二七)、東浜義男(一八三四)、小野幸(一八三八)、跡部昌三(一八四三)、織内信彦(一八四六)
その他として山田会長より、ナムチェバルワ登山計画、HATJの経過、年次晩餐会の準備状況、組織改組構想等についての説明があった。

十月理事会

十月十一日 十八時三十分
場所 本会会議室

出席者 村木副会長、松田、西村、小林、早坂、入沢、穴田、小倉、石橋、松本、藤井の各理事、大島、橋本両常任評議員、太田、飯野両監事
〔委任出席〕山田会長、藤平副会長、

重広、山本、伊丹、織田沢、関口の各理事、小倉、平林両常任評議員
〔審議承認事項〕
一、上高地山岳研究所改築特別委員会設置の件(石橋)

九月理事会の決定にもとづき、標記委員会の設置につき石橋理事より説明あり、次の通り本委員会の設置を承認した。
(1)目的および任務
(イ)行政当局との交渉ならびに各種認可申請書類の作成
(ロ)設計、建設計画の立案、予算案の作成

(イ)資金募集(会員募金、補助金)
(ニ)山研改築についての広報活動
(ホ)山研完成後の運営計画の立案
(2)委員会の構成
委員長：藤平副会長、副委員長：小倉山研委員長、委員：橋本清、松田雄一、西村政晃、飯野亨、中村太郎、太田晃介、赤羽孝一郎、溝口洋三、奥原教永、奥原幸、角田啓蔵、青木保良、吉村健児、石橋正美(事務局長)

(3)予算は一般会計の中で「山研改築会計」として計上する。
二、平成二年度秩父宮記念学術賞候補者推薦の件
〔中日ネ、チョモランマ・サガルマタ友好登山隊〕の業績を推薦すること

にする。

三、ナムチェバルワ登山の件
日中合同登山の偵察隊派遣の打ち合わせのため山田会長、伊丹理事が北京に出張中であるが、帰国を待って具体的行動にうつりたい。
四、「新ハイキング別冊」に「山岳」記事掲載(復刻)の件
新ハイキング社小林社長より、「山岳」十一年一号所収の「武蔵通志」、「山岳」二十年第一号所収の「多摩川の山川」(多摩郡村誌)の記事を掲載したことにつき、事後承認を求める書類が届いたので、本件承認する。

〔報告事項〕
一、名誉会員 後藤幹次、篠田軍治両氏物故の件
二、グルジア共和国スワネチアとの交歓登山の件
田村俊介海外委員を通じて提案のあった本件は、青年部で検討することにする。

〔委員会報告〕
・総務(藤井)
十月五日、新入会員を対象とした、会員懇談会を実施した。
・集会(入沢)
九月三十日、静岡支部石間信夫氏を囲む現地小集会を子持山で実施した。
・山研(石橋)
十月二十七日(土)閉所の予定。

・自然保護(松本)
九月十五、十六日、全国自然保護集
会を静岡支部の協力を得て三島市で開
催した。
十月十五、十六日、鳥海山麓八幡町
のスキー場建設地を視察の予定。
・資料・フィルム
榎家より装備品の寄贈を受けた。秩
父宮殿下ご愛用の装備とともに年次晩
餐会で展示の予定。

十一月理事会

十一月八日 十八時三十分
場所 本会議室

出席者 山田会長、村木、藤平両副会
長、松田、西村、小林、入沢、小倉、
伊丹、石橋、藤井の各理事、太田監事、
平林、橋本、小倉、鳴原各常任評議員
〔委任出席〕重広、山本、早坂、織田
沢、穴田、神崎、関口、松本の各理事、
大森常任評議員、飯野監事

議事
一、明治大学チヨモランマ遠征隊後援
依頼の件
一九九一年三、五月に実施するカン
シュンリッジからの登頂を目指す登山
隊の後援義使用の件を了承する。
二、ナムチェバルワ登山計画承認の件
山田会長、伊丹理事の中国からの帰
国をまって十月二十日緊急常務理事會
を開いて承認した左記事項を理事会と

して正式に承認する。

①偵察隊の派遣 重広恒夫隊長、早坂
敬二郎、大西宏、佐藤正倫の四名の
派遣を承認。なお同隊は既に十一月
三、五日にかけ、現地へ出発してい
る。

②偵察隊派遣予算二〇〇万円の支出
の承認

③登山隊準備組織の編成

・ナムチェバルワ委員会…(山田会長
を委員長とする最高機関)

・ナムチェバルワ登山実行委員会…
(村木副会長を委員長とする)

・ナムチェバルワ募金委員会…(今西
前会長を委員長とする)

の組織を決め、その人選を検討した。
三、本年度名誉会員推薦の件(鳴原)

十一月七日開催の評議員会の報告が
あり、本年度は見送りとすることを了
承する。
なおこれに関連し本年度の年次晩餐
会では、トランゴタワーで献身的な救
助活動を行った木本哲会員を、表彰す
ることも決定した(本紙五四四号三頁
参照)。

四、上半期決算の監査報告(太田)
監査の結果、適法且つ正確に処理さ
れていた旨の報告があった。

五、山研改築特別委員報告(石橋)
十一月七日第一回目の委員会を開
催。定例開催日、委員の役割分担、平

成三年十月の解体開始迄のスケジュー
ル等を検討した。

なお新たに委員として、坂本正智、
継松久美男、岡部みち子、堀嘉余子、
井野千枝子の五名を追加したい旨の説
明があり、併せて承認した。

六、支部行事報告(松田)

①山形支部主催による全国支部懇談会
「90蔵王の集い」ならびに全国支部事
務局担当者会議(十月十三、十四日)

②第六回宮崎ウエストン祭(十一月二
、三日)

③東九州支部創立三十周年記念「90由
布岳の集い」(十一月三、四日)

七、HAT-J発会式の報告(松田)

十月十六日、国際文化会館において
発会式が行われ、正式に発足した。会
員各位のHAT-Jへの入会を希望す
る。

八、各委員会報告
・図書
山崎文庫の目録が完成した。一部一
〇〇〇円で一〇〇部程作成したので希
望者は事務局へ申込みたい。

・海外連絡
藤本理事が四日市市へ転勤されたの
で、神崎理事を海外の責任者としてい
たい。

・科学研究
十一月十七日雨具に関するシンポジ
ウムを青山学院大学で開催の予定。

・青年部(伊丹)

グルジア共和国との交歓登山は目下
検討中。

・山研(石橋)

十月二十七日予定通り閉所した。本
年度の利用者は六〇六人で前年比八
%にとどまった。

・高所(伊丹)

十二月三十一日をもってタンポチェ
募金は締切ることになった。

・集会・指導(入沢・小林)
十月二十、二十一日、小川山で岩登
り講習会を開催。十三名の参加であっ
たが好評であった。

・総務(藤井)

年次晩餐会の準備に忙殺されてい
る。本会の最大の年中行事であるので、
役員、委員諸兄の協力をお願いしたい。

・自然保護(松本)
鳥海山の大規模スキー場の開発の件
で、十月十五、十六日、沢井委員長他
五名で現地調査を行った。十一月の定
例委員会にかけて結論を出したい。

九、組織改組に関する件(山田)
山田会長より、会長試案について理
事各位の意見を聞き度い旨の説明が
あった。

要旨は、良質のクラブライフを会員
各位に提供するにはどうしたら良いか
の観点に立って検討した。従来の担当
理事をサポートするための委員会に
は、実務を担当する委員会とは別に、

図書受入報告

図書委員会

平成2年10月受入図書

1. 西川一三著「秘境西域八年の潜行」中央公論社 1990(発行者寄贈)
2. R. ライト, B. バーガー著「カナディアンロッキー」Whitecap Books 1987(J. ステファニック氏寄贈)
3. 藤江幾太郎著「藤江幾太郎ネパール画周」山と溪谷社 平2(著者寄贈)
4. 阿保喜代春著「詩集 彩りの山」阿保喜代春 1990(著者寄贈)
5. 早稲田大学山岳部編「リュックサック 創刊号」(復刻)稲門山岳会 1990(発行者寄贈)
6. 会津山岳会編「白き聖地の峰 バギラティ」峰登山報告書 同会インドヒマラヤ登山隊 1990(大竹幹衛氏寄贈)

クラブライフを楽しむための場としての委員会もある。これらの委員会は「部会」のような形の誰でも参加できるような形にし、理事会のスタッフとしての専門委員会とは区別したい。なお理事会の下で会の実務を担当する部門としては、総務、経理、管財、出版、業務の五部十二係を置くというものであった。

これに対し、出席理事からは、支部との関係が不明確で、中央集権的な印象を与えないか。

・所詮JACはボランティアの集まりなので、義務づけが強すぎると抵抗がないか。

・考え方としてはわかり易いが、部門のグルーピングに無理があるような気がする。

・この機会に事務局と事務員の関係も明確にした方がよい。

等々多くの質疑応答ならびに意見が述べられた。

結論として、本件は委員会の整理、性格付けを行ってスタッフ機能、ライオン部門と明確にすることは、部門制度の導入と共に、総論としては賛成であるが、そのくくり方等については、実体には関係者の意見をよく聞いた上で、慎重に行う必要があることが再確認された。

ルーム誌

(10月)

1日	総務委員会
2日	婦人懇談会
3日	海外委員会、青年部報告会
4日	・パミール、ナンガパル
5日	学生部
6日	新入会員オリエンテーション
7日	高所登山委員会
8日	総務委員会
9日	常務理事会
11日	理事会、常任評議員会

15日	総務委員会、図書委員会
17日	岩登り集会講習会
18日	科学研究委員会
19日	監査、資料委員会
22日	フィルム委員会
26日	「山岳標高委員会」
29日	総務委員会
31日	ナムチェバルワ会議
10月来室者445名	
10月	
会員異動	
物故	
後藤幹次(名誉会員・一〇二四)	10・2
篠田軍治(名誉会員・一八八七)	10・7
内田英夫(八四二)	10・7
宮崎克之助(八三一四)	10・23
改姓	
小原ゆり子(一〇五五七)	↓井村ゆり子
門間多佳子(一〇四七〇)	↓渡辺多佳子
タンポチエ僧院再建協力募金者(芳名)	
五万円―國分勘兵衛。一万円―岩崎元郎、松永浩、新井ふみ。五千元―大木淑子、長岡信治	
十一月二日現在累計三〇二名、累計金額二、九六九、〇〇〇円	



◎現地小集会「黒斑山」

浅間山の外輪山「黒斑山」(日帰り)を積雪期に訪れます。

実施日 平成三年二月十七日(日)

集合 車坂峠 午前九時

申込み 二月六日(水)事務局まで参加者には別途計画書をお送りします。

集委会

◎後藤三男油絵展

―信州の山と安曇野を描く―

日時 平成三年一月十八日(金)―二十三日(水)

場所 東急日本橋店六階 美術画廊

◎西丸震哉・真美

山岳油彩小品二人展(最終回)

期日 九一年一月十一日(金)―十四日(月)

場所 ギャラリー・ミワ(中央区銀座6-17-2宝石店ミワ2階)

出会いの場作りを目的としたもので
毎年回を重ねてきたものだが、壁面を
埋めるだけ画くのがシンドクなったた
め、今回をもって終りとする。売上げ
は自然保護団体と心身障害者施設に贈
る。

訂正 十月号(五四四号)十頁の
二段目後から十六行目、「旧制第
二高等学校長など」の部分は誤り
ですので削除して下さいようお願
いいたします。(編集)

編集あとがき

平成二年もあと数日で終わろうとし
ています。おかげさまでわが会報『山』
は皆さまのご支援、ご協力によって何
とかここまでやってくることができま
した。明年もまたよろしくお願い致し
ます。どうかよいお年を。(A・O)

平成二年十二月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五―四

サンビュウハイツ四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 山田二郎

編集代表 小倉厚

電話 東京(261) 四四三三

振替口座 東京三―四八二九番

東京都港区赤坂一―三―六

赤坂グレースビル

印刷所 株式会社 技報堂